

「オデュッセウス」 あるいは〈語ること〉の遍歴

矢野正俊

人びとはそれを生き、次いでそれを物語る（ブランシヨ）

1

シェイクスピアが『あらし』で仮構する〈島〉は、世界の歴史があらゆるイリュージョンを剥ぎ取られて、圧縮され、たかたちで展開され繰り返される舞台である。プロスペローの〈島〉はユートピアではけっしてない。シェイクスピアは幸福な〈島〉の存在などというものを信じてはいない。「そういう島はあまりに大陸に近かった」（ヤン・コット）<sup>(1)</sup>のである。

シェイクスピアにとって人類の歴史は狂気である。権力闘争と殺人と反逆と暴力とでできた狂気としての世界史。この歴史の狂気を透きとおるように明らかにするために、絶海の孤島が仮構され、〈島〉の内部で狂気が演じつくされる。プロスペローはその魔法の杖のひとふりで、嵐を起こし難船させた人々を〈島〉へと導き、決定的な極限状況を、すなわちいつさいのイリュージョンをぬぐい去った純粹状態の極限状況を経験させる。

——十二年前、アントーニオが兄のミラノ大公プロスペローから権力を篡奪したと同じように、セバステイアンはナポリ王である兄のアロンゾーを殺そうとしている。かつてミラノ公国で行われたクーデターは現実であった。しかし、いまへ島で演じられる「クーデター」は狂気ではない。乗っていた船は岩に打ち当てられ、ほんの数えるほどの生存者が見知らぬ孤島に打ち上げられて彷徨っているだけなのだから。プロスペローの魔法の杖の内側で演じられ、繰り返される狂気としての世界史。

芝居は終わる。プロスペローは魔法の杖を捨ててミラノへと帰るだろう。もしも彼が魔法の杖を捨てなければ『あらし』は魔法についてのただのお伽話になってしまう。シェイクスピアにとって『あらし』という作品は、たんなる架空譚ではない。現実世界を相手にしたみずからの激しい総決算なのである。

在りと在る苦悩と試煉、畏怖と驚異、それがこの島を蔽うている（第五幕第一場）<sup>(2)</sup>

プロスペローの杖はへ島で、いつさいのイリュージョンを剥ぎ取った世界の歴史をもう一度繰り返させたのだった。けれどもプロスペローの魔法の杖が歴史を変えることはありえない。彼の魔術の力も終わらなければならぬ。歴史がふたたび始まる。人間は歴史からのがれることは出来ないのだ。

プロスペローはミラノへ帰るだろう。彼の帰還——それは、あらゆるイリュージョンを捨ててもう一度、現実の世界の歴史のただなかへと戻ることにはほかならない。ヤン・コットは、プロスペローのミラノへの帰還というこのてんに、このてんにだけ『あらし』という劇の困難で不安定なオプティミズムのよりどころをみている。<sup>(3)</sup>

それから私はわがミラノへ引きこもり、事ごとに墓を思いつつ暮らすことになりました。(第五幕第一場)

吾が身の果てはただ絶望のみ(エピローグ)

みずからの魂の地獄までの道を果てまでたどりつくし、いつさいのイリュージョンを剝ぎ取られた狂気としての世界史という試練を経てはじめて、帰還のテーマは獲得されている。であるならば、ここで「絶望」とは、プロスペローにとってあらゆるイリュージョンを無化して、もう一度最初からやり直すゼロ度の地平と言えるだろう。

エピローグ

プロスペロー　これにて吾が術は破れ、この身に残る力は生れながらの現身の、真にはかなき境涯、真の話、御見物の御意次第、この地に留まるとナポリへ赴くと、この身に否やはありません。出来ます事なら、こうして領地を二たび手に入れ、吾を欺きし輩を許したからには、かかる裸島に留まりとうはありませぬ、何とぞ皆様の呪いをお解き下さいませよう。この身の枷を取除くため、お手を拝借、拍手の雨をお浴びせ下さいませ。皆様の息の力で吾が船の帆を満たして下さらねば、折角皆様をお楽しませしようとしたこの身のもくろみも水の泡、もはやこの手には何も残ってはおりませぬ、手伝ってくれる妖精もおらず……働き掛ける術も無い——吾が身の果てはただ絶望のみ、友の祈りに助けを借りねばなりません、祈りはやがて天の扉を叩き、神の慈悲を動かし、この身の犯した過ちもすべて許されましよう……天罰を免れたきは皆様とて御同様、されば、そのお心にてこの身の自由を。(福田恆存訳)

いま、〈帰還〉という位相から〈島〉を振り返るとき、絶海の孤島は、ここで世界（史）の狂気が繰り返された舞台として、くつきりと浮き上がって見える。シェイクスピアにとって『あらし』は、それまでのみずからの全作品群を相手にした総決算であった。数々の作品において展開したテーマ群を方法としての〈島〉の内部に封じ込め、いつさいのイリュージョンを剥ぎ取って演じなおしたうえで、舞台としての〈島〉から外へ出ること——現実へ戻ることを試みた作品にほかならない。シェイクスピアはよく〈帰還〉の位相に到達し、作品の「エピローグ」は、こうした〈帰還〉の位相から方法としての〈島〉を過不足なく総体として語ることを可能にしていると言えるだろう。

シェイクスピアの〈島〉——それは世界（史）の舞台であり、劇場である。『あらし』の「エピローグ」はこうした〈島〉をトータルにみつめる〈帰還〉としての語りの位相に位置している。〈帰還〉としての語りの位相をプロスペローに獲得させたとき、シェイクスピアはその活動の舞台から退き、みずからの劇表現に終止符を打ったのである。

シェイクスピアがその作品群の最後に到達した〈帰還〉としての語りの位相。わがオデュッセウスが語りを開始していくのは、この〈帰還〉の位相においてである。もちろんストレートに語りだすことは出来ない。わたしたちは、頑なに〈帰還〉を意志する男のこの「漂泊譚」<sup>オデュッセイア</sup>の冒頭から、もしかすると〈帰還〉は不可能なのではないか、との暗い予測にとらえられる。

神々の会議で、ゼウスはオレステースに討たれたアイギストスを心に思い浮かべて言う。

「見よ、かのアイギストスを、定めを越えて、アトレウスが子の后をわがものとし、帰国した夫を殺害した。それも

免れぬ破滅を承知の上でのこと。」(第一卷三五—三七)<sup>(5)</sup>

『オデュッセイア』冒頭での、アトレウスの子アガムノン殺害をめぐる惨劇についてのゼウスの言及は、オデュッセウスの〈帰還〉のいわば前史として、作品全体に暗い影を落としている。アガムノンはトロイから帰国するや、留守中、彼の奥方クリュタイメーストラーと通じていたアイギストスによって殺害され、アイギストスもまた、成人したアガムノンの息子オレステースに父親の仇として殺されてしまう。

アガムノンには〈帰還〉の条件(に対する洞察)が欠けていた。「十年」という(非在の)時間の引き起こす変容を基底に取り込んだ語りを構築することなく、直接に帰国を計ったアガムノンは、いま・この言葉をもたない。彼が言葉を獲得し、語りだすのは「冥界」に亡霊となつてからのことである。

いわば「永遠の現在」としてホメロスの作品の中で直立しているアキレウスはもちろんのこと、アガムノンにも〈帰還〉の視点はない。〈帰還〉は不可能なのだ。

かれらはもつとも単純な罠によつてこのような状況に落ちこんだのだ。出発のときは、かれらの心は軽やかである。自分のためには力に溢れ、自分に逆らうものとしては真空しかないときはいつでもそうなのだ。武器は自分の手のなかにあるし、敵はその場に不在である。魂が敵の名声によつてうちのめされてでもないかぎり、いつでも人間というものは不在の敵よりはるかに強いのである。不在者は必然の軛を課しはしない。いかなる必然もこのように出立する人びとの精神にはいまだ現れない。だからこそ、かれらはゲームに赴くかのように、日常の束縛から解かれて休暇に出かけるかのように、出立するのである。(シモーヌ・ヴェーユ／『イリアス』あるいは力の詩篇／富原真弓訳)<sup>(6)</sup>

まるで戦争がゲームであるかのような出立時の状態は長くは続かない。恐怖・敗北そして愛する仲間の死が戦士の魂を必然の軌のもとに屈従せしめる。

オデュッセウスの〈帰還〉は、こうした幾重にも重なり合い錯綜した必然の軌を内側から押しひらき、これを展開していく力をもった語り、を獲得したときに果たされるだろう。『オデュッセイア』における「島々」は、孤立して固く閉ざされた必然の軌にほかならない。いま、オデュッセウスはこうした「島々」を通り過ぎるのではなく、ひとつひとつ遍歴していかなければならない。〈帰還〉としての位相で語り、を構築するために、だ。

## 2

アリストテレスは『オデュッセイア』の叙事詩としての物語形式の特徴を明快に指摘している。

劇においては、挿話は切りつめられるけれども、叙事詩は挿話によつて長くなる。じじつ、『オデュッセイア』にしても、物語の筋書そのものはそれほど長くはないのである。

「ひとりの男が、長年のあいだ故郷をはなれていた。その男は、海神ポセイドンに見張られ、ただ一人であった。そして家では、彼の妻への求婚者たちによつて財産が浪費され、息子が謀殺されようとしていたが、彼は苦難に揉まれた末、帰り着き、何人かの者に自分の正体を明かしたうえで、求婚者たちを攻撃し、自分は助かり、敵たちをほろぼした。」

『オデュッセイア』に固有な肝心の部分はこれだけであつて、あとはすべて挿話なのである。（『詩学（創作論）』藤沢令夫訳）<sup>7)</sup>

物語の「筋書」は簡単であり、あとはすべて「挿話」にほかならない。アリストテレスの指摘する『オデュッセイア』の「挿話」の特色をアウエルバッハは、『ミメーシス』冒頭の「オデュッセウスの傷痕」の章で見事に分析している。ここでアウエルバッハは、ヨーロッパ文化における文学的現実描写についての試論を提起するという壮大な構想の端緒として、『オデュッセイア』の傷痕の場面と旧約聖書におけるイサクの生贖の場面とを比較することで、ヨーロッパ文学の現実描写に本質的な影響を与えた相対立するふたつの基本型の存在を指摘しているのであるが、『オデュッセイア』第九巻中の、かつてオデュッセウスの乳母であつた老女のエウリュクレイアが、帰還した彼をその腿の傷痕からオデュッセウスと認める場面は、これを中断する七十余行の「挿話」を含みこんでいる。この「挿話」というのは、老女が傷痕に気づく場面、すなわちその危機の瞬間に始まり、その傷痕の起源、オデュッセウスが子供の頃祖父アウトリュコスを訪れて猪狩に行つたときの事故を記述しているものである。

ふつう、物語の流れを中断して語られる「挿話」は緊迫感を高めるためのものであり、であれば「挿話」という前景の背後には、そうした緊迫感とともにその解消を待ち望むべき危機がはつきりと存在していなければならぬ。しかしながらホメーロスの詩作品には、背景が存在しない。彼が語るのはいつでも前景、すなわち空間と時間の次元の全き現在のことばかりなのだ。物語の舞台も読者の意識も全く現在だけで占められてしまう。ホメーロスにあつては、緊迫感を惹起するはずの中断はむしろそれを緩和する方向に働いている。

若いエウリュクレイアが赤子のオデュッセウスを宴の後、祖父アウトリユコスの膝に置いた瞬間（四〇一行以下）、この場面の数行前で旅人の足に触れていたエウリュクレイア、あの年老いたエウリュクレイアは、舞台と読者の心から完全に消えてしまうのである。<sup>(9)</sup>

こうして傷痕にまつわる物語は、独立した全き現在となる。物語の前後への移行にもかかわらず、ある瞬間に物語られている事柄は、遠近法的展望のない、現在のみという印象を与えている。登場人物の過去の有様を、現在の状況からは完全に捉えられない、いわば絶対的な存在として描写するホメーロスの手法は、前景と背景が生じ、過去の深淵に対する現在という展望がひらけてくる「主観的・遠近法的手法」とは、全く異質のものなのである。

『オデュッセウス』の「挿話」は背景をもたず、「遠近法的な展望」のない「全き現在」として、「均等な明るさと客観性を有する現在」として独立している、というアウエルバッハの指摘は、「全面的真実を語るホメーロス」というオールダス・ハクスレーの主張（「悲劇と全面的真実」一九三二）<sup>(10)</sup>とも重なるだろう。

オデュッセウス一行のうちの、手でも力でもいちばんすぐれた六人を怪物スキュレーに啖<sup>くち</sup>われてのち、島に着いた一行は船から下りて上陸すると、「巧みに夕餉を用意した。だが、十分に飲み食いすると、スキュレーが船の中から取って食った親友たちを思い起こして、泣いた。泣いているうちに深い眠りが襲った。」（第十二巻・高津春繁訳）

ハクスレーは言う。——ホメーロス以外の詩人であれば、スキュレーに六人の仲間たちをのみこまれたからには、あとに生き残った者たちをして自分たち自身の災難と仲間を襲った恐ろしい運命とを嘆かせ、ひたすらに泣かせたであろう。そしてこの一節を彼らの涙をもつて悲劇的な結末に終わらせたであろう。なんととってもオデュッセウスにとって、この出来事は「海路<sup>うみじ</sup>を求めつつ、わたしのなめたありとあることの中で、これこそわたしが目にしたいいちばん哀れなも

のであった」のだから。

ホメロスはけれども全面的真実を語るほうをえらんだ。最も残酷な方法で仲間を奪われたものといえども食わずには  
いられないことを、彼は知っていた。餓えが悲しみより強く、餓えをみたすことが涙にさえ先行することを彼は知っ  
ていた。彼はまた、一芸に秀でたものが、たとえ仲間がとって食われた直後であつても、またたとえその一芸とい  
うのがたかが夕食の調理に過ぎなくても、やはり手ぎわよく事をはこび、やはり芸の達成に満足をみいだすことを、知  
ていた。腹がくちくなれば（そして腹がくちくなつた時にのみ）人間は悲しむ余裕を生じること、晩餐後の悲しみ  
が快樂に近いことも、彼は知っていた。最後に彼は、餓えが悲しみに先行するごとく、つづいておこる疲労が、悲し  
みの進行をとどめると同時に、親しきものの死を忘れさせるだけそれだけに一だんと甘美な眠りのうちに悲しみを埋  
没させることも、知っていた。一言でいえばホメロスは、この主題を悲劇的に扱うことをこぼんだ。彼は全面的な真  
実を語るほうをえらんだのである。<sup>(11)</sup>

劇中の状況や人物を「化学的純粹さ」に保たなくては承知しない悲劇の作家たちに対して、すべての事実を許容して、  
なにひとつ避けたりしない「全面的真実」を語る作家たちのひとりとして、ハクスレーはホメーロスを位置づけている。  
物語の「筋書」そのものは簡単であり、「挿話」に作品の重量はかけられている、とのアリストテレスの指摘。そして  
また、それぞれの「挿話」は独立した「全き現在」として「均等な明るさと客観性」を有している、とのアウエルバッ  
ハの分析を介してみたとき、ここでハクスレーの言う「主題を悲劇的に扱う」のではなく、「全面的真実」を語るホメー  
ロスなる位置づけの意味もまた明快であるだろう。

ハクスレーのこうしたホメーロス評価の意義は認めつつも、しかしながら、ハクスレーが彼の主張の例証として挙げた『オデュッセイア』の「第十二歌」を語っているのは作品の構造からすればオデュッセウスにほかならない。であれば、まず問われなければならないのは、語るオデュッセウスのその語りの基底であるだろう。

次に問われるべきは、オデュッセウスの語りが遍歴していく「島々」の意味である。

たとえばレヴィナスは一貫して、オデュッセウスの「世界遍歴」を「帰還に付随した偶発事」としてしかみなしていない<sup>(12)</sup>。オデュッセウスにとって「島々」は「故郷イタケー島」へと帰りつく途次の、たんなる通過点でしかないのだろうか。ひとつひとつの「島」での出来事（の意味）は「アクシデント」「空想上のもの」でしかないのか。レヴィナスはあまりに『オデュッセイア』という作品の「物語の筋書」にとらわれすぎているように思う。アウエルバッハの分析をかりて言えば、『オデュッセイア』をまるで『旧約聖書』を読むかのように読んでいるといえるだろう。たしかに「物語の筋書」としては、オデュッセイアの目ざすところは故郷イタケーへの帰国であり、「島々」（を訪れること）はその途次における意図せざる出来事であるだろう。けれども、これらの出来事はアウエルバッハの指摘するとおり、ひとつひとつが独立した「全き現在」を構成している「挿話」なのだ。作品における〈島〉および〈島〉の遍歴は〈帰還〉と等価な「前景」を構成しているのである。

オデュッセウスの語りは、いかなる「物語」にも、たとえそれが「帰国物語」であろうとも、特権的な結末を与えることはない。

オデュッセウスひとりの帰国には全ギリシャ軍のトロイアからの帰還が反映している。（ヘーゲル『美学』竹内敏雄訳。強調は原文）<sup>(13)</sup>

〈帰還〉は特権的・局所的・個人的なものではなく、トータルなものでなければならぬだろう。固く閉ざされた必然の軌（「神話」）としての「島々」の踏破・遍歴は語るオデュッセウスにとって、全面的な〈帰還〉を獲得するために不可避なのである。

3

ビンスワングアの『夢と実存』仏訳版（一九五四）<sup>(14)</sup>の「序論」でミシェル・フーコーは、「実存の根源的諸次元に或る具体的なかたちを与えるような表現行為」が身を置く「さまざまな初次的方向」（「実存の本質的諸方向」）に言及しているが、こうした方向の第一に、「近空間から遠空間へと向かう線上で」出会う「表現の特殊な一形式」として叙事詩的表現を位置づけている。ここで「近空間」とは、「休息や親しみの空間であり、われわれの手もとにある空間」であり、「遠空間」とは、「それによってわれわれがおのれを解放したり、うまく逃れ出たりするような空間であり、あるいはわれわれが探査したり征服したりしようとする空間である」<sup>(15)</sup>。

近空間から遠空間へと向かう線上でわれわれは表現の特殊な一形式（である叙事詩）に出会うことになる。そこでは実存は、輝かしい門出の曙光、幾多の航海と巡歴、驚くべき発見の数々、町々の攻囲戦、行く先々で罫にはまる流浪の旅、頑なな帰還の意志、そして昔どおりの変わりのない様子を見たときの苦い思いなどを体験する（…）<sup>(16)</sup>

妻や子に囲まれた親しいイタケー（「近空間」）から戦いの場であり征服の対象であるトロイア（「遠空間」）への出立。十年の歳月を介して、いま帰還は、出立とは逆の、「遠空間」から「近空間」へのプロセスを辿ることにより獲得されるのだろうか。アガ멤ノーンの帰国「死」（わたしは家に帰って、子供たちや召使たちに喜び迎えられるものと思つていたのだが<sup>(17)</sup>）は、こうした帰還の不可能を物語っているだろう。

生きられる空間にあつては、移動は根源的空間の性格を保持している。すなわちそれは通過するのではなく遍歴するのであり、足を止めるその瞬間まで、確かな知識といえばおのれの出発点以外なにももっていない開かれた軌道でありつづける。その未来は、平面の地理学によって左右されるものではなく、その真の歴史性のうちに待機している<sup>(18)</sup>。結局のところ、このような空間のうちでこそ、さまざまな出会いが起こる。

空間はある生成過程を経てはじめて構成される<sup>(19)</sup>。

オデュッセウスが遍歴していくことになる神話的な「島々」は「近空間」でも「遠空間」でもない。固く閉ざされた必然の軌としてあるそれぞれの「島」（「神話」）はこれを全的に踏破することにより「島」（「神話」）の「生成過程」に立ち会い、これを語りついでいくことで構成される空間にほかならない。

もろもろの神話はホメーロスの素材をなす層のうちに沈澱している。しかし、神話に関して報告すること、散乱した伝説を統一した形に仕立て上げることは、同時に、主体が神話的諸力から逃れ去る道程を記述することである。（アド

いま、オデュッセウスは語りはじめる。通り過ぎてきたのではなく遍歴してきた「島々」のひとつひとつを。地理上の空間でなく、みずからの生き抜いてきた空間を。生き抜いてきたからこそ可能であった「島」でのさまざまな出会いを。——語るオデュッセウス。

4

オデュッセウスは語りはじめる。

七年余の間、カリユプソー女神のオーギューギー島にとどまることを余儀なくされていたオデュッセウスであるが、アテーネー女神の愁訴を聞き入れたゼウスはカリユプソーのもとへヘルメース神を派遣する。ヘルメースの説得の甲斐あって、ようやくカリユプソーの島から出ることが出来たオデュッセウスは筏に乗って航海するが、暴風に襲われて難破、辛うじて泳ぎ着いたところが、いま、語りを開始したスケリエー島のアルキノオス王の館である。

ロートパゴイ(蓮の実を食う人々)

食蓮人<sup>ロートパゴイ</sup>たちもべつにわれらの仲間を殺すつもりはなく、蓮<sup>はす</sup>を食べさせたのだが、蓮の甘い実を食べた者は、みんな、報告しに帰って来る気はもうなくなって、その場で食蓮人<sup>ロートパゴイ</sup>たちと蓮を食べてとどまりたがって、帰国を忘れてし

まったのだ。<sup>(21)</sup>

忘却と意志の放棄。安逸にして無為な生活。言葉以前の原初の停滞。「蓮は東方の食物である。(中略)おそらく、こういう食物に惹かれるのは、山の幸・海の幸を採り集めていた状態に立ち帰ろうとする誘惑に他ならない。それは、農耕・牧畜また狩猟にさえ先立つ、つまり、いかなる生産活動にも先行した段階である」(ホルクハイマー/アドルノ)<sup>(22)</sup>  
〈帰還〉というオデュッセウスの語りの位相は、歴史の原初・遙かな国・遠い昔の幸福への追憶に停滞するものであつてはならない。

泣いているかれらをわたしは無理矢理に船につれて来て、うつろな船のベンチの下に引きずりこんで縛つた。<sup>(23)</sup>  
そこでわれわれは、重苦しい心のままに、さらに先へ船を進めた。<sup>(24)</sup> (強調は引用者)

### キュクロープス(二つ目の怪物)

かれらは不死の神々まかせで、自分の手で植えもせず耕しもせず、小麦に大麦に、大きい房をつける、ゼウスの雨がかれらのために大きくしてくれる葡萄の木、これらがすべて播きもせず耕しもせずに生えている。<sup>(25)</sup>

「<sup>(26)</sup>食蓮人<sup>ロトパゴス</sup>たちよりは後の時代を、狩人や牧人の時代である本来の野蛮時代を代表している」(ホルクハイマー/アドルノ) キュクロープスたち。豊饒は法律を必要としない。

かれらには事をはかる集会も掟もなく、高い山の頂きのうろの岩屋に住み、一人一人が子供や妻を裁き、たがいにまったく知らぬ顔だ。<sup>(27)</sup>

こうしたキュクロプスたちのうちでも、ひとときわ群を抜いた大怪物ポリュペーモスとの出会い。

オデュッセウスはポリュペーモスに名前をきかれ、「タレモナシ (Ouis)」だと言う。閉じ込められた岩屋からの脱出をはかるオデュッセウスに目玉を潰されたポリュペーモスは、駆けつけた仲間に下手人を尋ねられ、「タレモナシ」だと答えたために、仲間のみな立ち去ってしまう。言葉とその指し示す対象との同一性を疑わないポリュペーモスは当然、語られた内容に固着している。

かつては、語られた言葉はそのまま神話における運命、宿命であった。神話に登場する形象たちによって播がしがたく執行される運命の宣告がその中で語られる表象の圏内では、言葉と対象との区別はまだ知られていない。(ホルクハイマー／アドルノ)<sup>(28)</sup>

「ウーティス」と名のることが、語られた表象(「名前」)にぴったり一致してしまうのではなく、「ウーティス」という言葉(「誰デモナイ者」)自体として、語られた表象から分離・独立させて発せられたとき、オデュッセウスは語る、ことのいわば「ポリュペーモ斯的段階」を脱したと言えるだろう。語る、ことと語られたことの間隙を縫って、オデュッセウスはポリュペーモスの暗い洞窟(語られた言葉が神話的な力を保持する領域)から脱出する。このとき、語られた

表象に一方方向的に還元されることのない語ることをオデュッセウスは獲得したのである。

だがしかし、「名前の詭計」によって到達した語ることの段階は、〈帰還〉の位相での語ることからはまだ程遠い。語ることはこの段階のままでは、その同致すべき対象を喪失して浮遊するばかりである。海に逃れたオデュッセウスが部下たちの制止を振り切り、まだ巨人の投石の到達圏内にあるうちからポリリュペーモスに悪態をつき、さらには自分の氏素姓まで名乗ってしまう（このため海神ポセイドーンの憎しみをかい、帰還はさらに困難となるのだが）というのも、「愚行」あるいは「思いあがり」というよりも、語ることの「漂流」に対抗し、語ることをたしかな地に〈帰還〉させる（〈帰還〉としての語りの位相に到達する）いわばマニフェストであるように思う。オデュッセウスはけっして饒舌ではない。

そこから、死の手を遁れたことを喜びながらも、親しい仲間を失って、心を痛めつつ、船旅をつづけた<sup>(29)</sup>。

ホルクハイマー／アドルノも言うとおり、「自然の暴力を出し抜く語りの言葉は、途中で打ち切ることはできない」<sup>(30)</sup>のだ。語ることの遍歴はさらにつづいていく。

### アイオリエーの浮島（風の司アイオロス）

「甘い眠り」のなかの苦い夢のような風の司アイオロスの物語。アイオロスの「浮島」は語ることの浮遊に見合っている。不死の神々に気に入られ、「六人の息子の嫁に六人の娘」をやって、なにひとつ欠けるものとしてないアイオロスの

島には、語る、ことが励起され立ち上がる契機が存在しない。

アイオロスに問われてオデュッセウスが「すべて順序よく」話したアカイア人の帰国のことどもは、所詮、宴の席での帰国譚（語られた<sup>はなし</sup>）でしかない。語る、ことの基底を喪った浮遊する語りであるからこそ「すべて順序よく」語られるのだ。〈帰還〉としての語りには程遠いのである。アイオロスの助けを借りて「十日目」には「もう狼火の世話をしている人が見えるくらいに近く」、故郷の地に近づくが、まるで夢でも見ているようだ。案の上、帆をあやつりつづけてきたオデュッセウスを「甘い眠り」が襲い、「もろもろの風の道」を閉じこめてあったアイオロスの皮袋は部下たちに開かれて、「浮島」へと逆戻り。文字どおり、取りつく島もなくアイオロスに追い払われてしまう。

そこからわれわれは重い心でさらに船旅をつづけた。もう前のように追風が吹かないのは、自分の愚かしさによるとはいえ、オールを漕ぐ苦しさに、部下の者たちの勇氣はくじけた。<sup>(31)</sup>

### キルケー／アイアイエーの島

『ラーエルテースの子、ゼウスの後裔なる策に富んだオデュッセウス、今はもう激しい悲嘆はおやめなさい。あなたが魚にみちた海原でどれだけ苦しい目にあい、陸ではどれだけ敵意をもった者たちがひどいことをしたかは、わたし自身もよく知っている。だが、さあ、はじめて険しいイタケーの故里を後にした時のように、また勇氣を胸内に取り戻すまで、食べ物を食べ、お酒を飲んで下さい。苦しい放浪が忘れられずに、今は疲れ切って、意氣銷沈し、あまりにも苦しい目にあつたために、あなた方はたのしむ心を失っている』<sup>(32)</sup>（強調は引用者）

「魔法を使うアイエーテースの実の姉妹、うるわしい髪の、恐ろしい、人間の言葉を話す女神キルケー」。彼女はオデュッセウスの苦難をすべて知り尽くしている。であるなら、語ることは不要であろう。トロイアからイタケーへの漂泊の旅で、もはや身も心も疲弊し切っているのだ。出立のときのあの軽やかな心を思い起こし、いまはゆつくりと休むことをすすめるキルケー。ありあまる肉と甘い酒。自足した循環を体現するキルケーの「優しさ」ははかり知れない。

オデュッセウスの体験した出来事を知悉したキルケーの島で、もはや語るべきことはなにもない。語るべき対象から離れた語ることは、この満ち足りた循環のなかにあって一層浮遊するばかりだ。——「季節がひとめぐりをすませたとき」、帰還を願い出たオデュッセウスにキルケーの出した条件。死者と生者の国のあいだを流れるオーケーアノスの流れを渡った、地の西の果てにある〈冥界〉への「別の旅」をしてくること。語ることは無縁の満ち足りた島での循環から外へ出るためには、いままでとはまったく異質の旅をしてこなければならぬのだ。

〈冥界〉で出会った盲目の予言者テイレシアースの魂。「予言」とは、語られた未来への帰還であるといえるだろう。テイレシアースの「予言」を未来からいま・ここへと開示すること。語られた未来（＝「予言」）および語られた過去（＝「神話」）からの、不断の現在化としての帰還。——これがオデュッセウスの〈帰還〉としての語りの基底を構成する。

次に、〈冥界〉での沈黙を体現するオデュッセウスの母および太古の高貴な女性たちがやって来る。犠牲の牡羊の「黒い血」が彼女らに言葉を与える。息子が出征して後の苦難を語りおえると、母の魂はこう言う——「だが一刻もはやく陽の光へとお急ぎなさい。後日あなたの后にも話せるように、ここでのことをすべてよく心にとめておきなさい」（強調は引用者）<sup>(33)</sup>

羊たちの中で「いちばんきわ立ってまっ黒な牡羊」の犠牲の「黒い血」が〈冥界〉の女たちの神話的な沈黙・初源の沈黙を開くのであれば、イタケーで夫の帰還を待つペーネロペイアと言葉を交えるためにオデュッセウスの語ることの基底には、犠牲の「黒い血」が取り込まれなければならないだろう。だが、「黒い血」は〈冥界〉での犠牲の捧げ物だ。〈冥界〉から帰還したとき、地上にあって、女たちの源初の沈黙を開きうる「黒い血」に相当するのは一体になのか。こうした問いを媒介することなく帰国して殺されたアガメムノーンの悲しみにみちた魂は、〈冥界〉にあって無念さを吐きだすばかりである。——「それだから、今後は妻に対してさえやさしくせず、自分の考えもすっかりは打ち明けず、一部は教え、一部はひめておくことだ」<sup>(34)</sup>「もう一つわたしの言うことをようく心に刻んでおくがよい。もはや女は信頼できぬゆえ、そつと、かくれて国の地に船を着けることだ」<sup>(35)</sup>

とうに力を失った過去の神話の英雄たち（ミーノース、オーリーオン、ティテュオス、タンタロス、シーシュポス、ヘーラクレース）を語ることで神話的な諸力から逃れ去るオデュッセウス。〈冥界〉から帰還したオデュッセウスの一行にキルケーは言う。

『生きながらハーデースの館に降りて行くとは、なんとという大胆不敵のお方たち、ほかの人たちが一度しか死なないのに、二度死ぬとは』<sup>(36)</sup>

〈冥界〉でのことを尋ねるキルケーにオデュッセウスは「すっかり順序よく語り終える」。かつて風の司<sup>つかさ</sup>アイオロスの館で「すべて順序よく話した」ときとはもちろん異なる。語ることは、いま、その基底に〈冥界〉の沈黙（女たち）・無念

さ（アガメムノーン）そして「命のない死人しびどの王となるよりは、生きて、暮しの糧かもあまりない土地をもたぬ男の農奴になりたい」<sup>(37)</sup>（アキレウス）とのひたすらなる生への希求をかかえこんでいる。語ることの浮遊ではない、語ることの遍歴——キルケーが課したこれが「冥界行」の条件の意味であろう。条件の果たされたいま、遍歴の道筋をオデュッセウスに話すと女神は島の奥へと立ち去っていく。

「セイレーンの歌」。語ることの遍歴にとって、これが最後の試練となるだろう。

### セイレーンの歌

語ることの遍歴をつづけるオデュッセウスにとって浮遊（へ帰還）の断念への誘惑は至る所にあつた。セイレーンたちの出会いは、語ることの浮遊からの最後の試練を構成する。

語ることの浮遊。この浮遊をどこまでも押し進めれば語られたことは遠くふるい落とされ、語ることはやがて「歌」へと昇華されていくだろう。語ることから引き離されふるい落とされた語られたことの死。言葉のもつ意味（性）の墓場。

セイレーンたちは野原に坐つてその呪わしい歌で魅し、そのまわりには朽ち枯れた骨がうず高く、しぼんだ皮が骨についている。<sup>(38)</sup>

セイレーンたちの島では、語られたことは「朽ち果てた骨」と化し、語ることの意味（性）は「しぼんだ皮」として語

られたことに貼りつき、その形骸を辛うじてとどめるだけだ。語ることの意味（性）を捨象し、語ること自体を純粹に昇華させることで獲得できる「歌」の力。

『いざ、ここへ、その名も高きオデュッセウスよ、アカイア人の大いなる誉れよ、われら二人の声を聞くべく、船をとどめよ。われらが口より流れ出る蜜のように甘い声を聞かずして、黒い船にてここを通り過ぎた者としてなく、耳にした者はすべてよろこび、前よりも賢明となつて立ち去る。われらは知っている、広いトロイエーにて神々のみ心によりアルゴス人とトロイエー人がうけたすべての苦しみを、われらは知っている、瑞穂の大地で起こったかぎりのことを』<sup>(39)</sup>

キルケーと同様にセイレーンたちもオデュッセウスの蒙つたすべての苦しみを知っている。「万物を養い育てる大地の上で起つたことなら」何でも知つてゐるのだ。既知性の圧倒的な包圍のなかで、一瞬たりとも語ること、を放棄するなら〈帰還〉への意志は霧消してしまふだろう。

キルケーの忠告に従い、セイレーンの「歌」に幻惑されぬようオデュッセウスは手足を帆柱受けに縛りつけさせる。語ることへの意志としてこれを見るなら、オデュッセウスを帆柱受けに縛りつける繩の一本一本は、あの〈冥界〉の沈黙であり、地上で語りえないことの無念であり、ハーデースに王たるより生きて地上で奴隷でありたい、との強烈な生への希求であるだろう。「歌」への語ることの上昇ではなく、語ることの意志の持続（〈帰還〉を手離さないための「繩」）。セイレーンたちの歌とはどのような本性のものなのか？ その欠陥はどのような点にあつたのか？ その欠陥が、なぜ彼女たちの歌を、あのように強力なものにしたのか？ ——ブランシヨの矢継早の問いかけにわたしも答えてみる。<sup>(40)</sup>

語る、こと、の浮遊の純粹な抽出、これがセイレーンの歌の本性であり、語る、こと、の意味（性）の死、これが彼女たちの歌の欠陥であると同時にその力であるだろう。

これ（「セイレーンの歌」——引用者註。）は、ひとたび耳にされるやあらゆることばのなかに深淵を開き、否応なくそこに姿を消していくように誘う深淵の歌である。<sup>(41)</sup>

むしろこう言うべきだろう。「セイレーンの歌」とは、ひとたび耳にされるやあらゆることばの意味（性）を抜き取り、語る、こと、の意志を奪い去って語る、こと、の〈帰還〉の位相を自壊させていく「歌」（の力）である、と。

オデュッセウスはセイレーンの歌を耳で追いかけてつ誘惑から逃げ去る。たしかに「この試練のあとで、世界はまえよりも貧困化している」（ブランシヨ）<sup>(42)</sup> かもしれない。しかし、オデュッセウスは語る、こと、の遍歴をとおして、語られた過去である「神話」から帰還し、語られた未来である「予言」から帰還してきた。語る、こと、と語られた対象とのあいだの隘路に埋没することなく抜けだしてきたのだ。〈帰還〉とはオデュッセウスにとって、（神話的な）過去から（予言としての）未来へとつづく時間軸の上でのたしかかな目標などではなく、不断の現在化である。だから〈帰還〉とは、語る、こと、語られた未来にも語られた過去にも、語られた対象にも還元されることなく、語り、つづける、こと、にほかならない。

「歌」の断念により「貧困化した世界」。だが「歌」への昇華を断ち切って獲得した語る、こと、の意味（性）は、語る、こと、の遍歴をとおして、この「貧困化した世界」においてなおも未知の危機をはらんだ多様な〈出会い〉を可能にさせている。語る、こと、の遍歴が可能にする〈出会い〉を生きるもの——これが〈オデュッセウス〉なのである。

シェイクスピアの『あらし』解釈については、ヤン・コット『シェイクスピアはわれらの同時代人』（蜂谷昭雄・喜志哲雄訳）所収の「プロスペローの杖（『あらし』論）」に大方を負っている。また、ホルクハイマー／アドルノの『啓蒙の弁証法』（徳永恂訳）からは『オデュッセイア』へのアプローチのラディカルさを教えられた。『オデュッセイア』からの引用は高津春繁訳に拠っているが、呉茂一訳（岩波文庫版）にも大変お世話になっている。

注

- (1) ヤン・コット『シェイクスピアはわれらの同時代人』蜂谷昭雄・喜志哲雄訳 白水社（一九六八）所収「プロスペローの杖（『あらし』論）」三〇七ページ。
- (2) シェイクスピア『夏の夜の夢・あらし』福田恆存訳 新潮文庫（一九八七・二十九刷）二二七ページ。
- (3) 前掲、ヤン・コット 三二一ページ。
- (4) 前掲、福田恆存訳 新潮文庫 二二八ページ。
- (5) ホメーロス『オデュッセイア』高津春繁訳 筑摩書房（世界文学大系1・一九六一）
- (6) シモーヌ・ヴェーユ『ギリシアの泉』富原眞弓訳 みすず書房（一九八八）所収『イリアス』あるいは力の詩篇』三四ページ。

(7) アリストテレス『詩学(創作論)』藤沢令夫訳 筑摩書房(世界古典文学全集第十六卷・一九六六)三五―三六ページ。

(8) E・アウエルバッハ『ミメーシス』篠田一士・川村二郎訳 筑摩書房(筑摩叢書75・一九六七)上巻 第一章。

(9) 同右、七ページ。

(10) 中野好夫・篠田一士編『東西文芸論集』平凡社(世界教養全集 別巻2・一九六三)所収ハックスリ―「悲劇と全面的真実」朱牟田夏雄訳。

(11) 同右、三九―四〇ページ。

(12) もちろんレヴィナスはオデュッセウスの「帰還」それ自体について考察しているわけではなく、「自己(意識)」「労働」「エロス」などのテーマをめぐって、西欧哲学の根幹を問うラディカルな問題意識の下にオデュッセウス(の帰還)を「喩え」に引いているのであるが、それにしてもこの「喩え」はレヴィナスの思考の重要な転換点でしばしば引き合いに出されているように思う。

思考が自分自身のうちに閉じ込められているのは、思考の超越がどんな冒険をしようとも、この冒険は結局空想上のもの、オデュッセウスの冒険のようにわが家に戻るためになされるものだからである。(エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限——外部性についての試論——』合田正人訳 国文社一九八九 二四ページ)

労働は家から出来し、家に戻る。これはオデュッセウスの冒険譚の運動であって、この運動においては、世界遍歴は帰還に付随した偶発事ではない。(同二六九ページ)

へエロスは、いかに冒険しようともオデュッセウスのように故郷の島に戻る主体の構造をもはや有してはいないのだ。(同四二〇ページ)

「汝自身を知れ」が全西欧哲学の根源的戒律であることができたのは、究極のところ西欧が西欧自身のうちに宇宙を再び見いだしているからである。オデュッセウスにとってその世界周航が帰途上の一つのアクシデントであったように。『オデュッセイア』はその意味で文学を支配している。(レヴィナス『困難な自由——ユダヤ教についての試論』内田樹訳 国文社一九八五 一九ページ)

レヴィナスとは違った意味で、わたしも『オデュッセイア』は『ロビンソン物語』同様、西欧の文学(思想)を「支配」していると、考える。この論考もその検証のささやかなアプローチを指すものである。

- (13) ヘーゲル『美学』(第三巻の下) 竹内敏雄訳 二二四七ページ 岩波書店(ヘーゲル全集20c・一九八二・第二刷)
- (14) L・ビンスワンガー/M・フリーコー『夢と実存』荻野恒一・中村昇・小須田健訳 みすず書房(一九九二)
- (15) 同右、七七ページ。
- (16) 同右、八三―八四ページ。
- (17) 前掲、『オデュッセイア』第十一卷430―431
- (18) 前掲、フリーコー『夢と実存』序論 七六ページ。
- (19) 同右、七五ページ。

(20) マックス・ホルクハイマー／テオドール・W・アドルノ『啓蒙の弁証法 哲学的断想』徳永恂訳 岩波書店(一九九〇)七〇―七一ページ。

- (21) 前掲、『オデュッセイア』第九卷92―97
- (22) 前掲、『啓蒙の弁証法』九一ページ。
- (23) 前掲、『オデュッセイア』第九卷98―99
- (24) 同右、第九卷105
- (25) 同右、第九卷107―111
- (26) 前掲、『啓蒙の弁証法』九二ページ。
- (27) 前掲、『オデュッセイア』第九卷112―115
- (28) 前掲、『啓蒙の弁証法』八六―八七ページ。
- (29) 前掲、『オデュッセイア』第九卷565―566
- (30) 前掲、『啓蒙の弁証法』九八ページ。
- (31) 前掲、『オデュッセイア』第十卷77―79
- (32) 同右、第十卷456―465
- (33) 同右、第十一卷223―224
- (34) 同右、第十一卷441―443
- (35) 同右、第十一卷454―456
- (36) 同右、第十二卷21

- (37) 同右、第十一卷 489—491
- (38) 同右、第十二卷 44—46
- (39) 同右、第十二卷 184—191
- (40) モーリス・ブランショ『来るべき書物』粟津則雄訳 筑摩書房（一九八九）五ページ。
- (41) 同右、六ページ。但し一部改訳。
- (42) 同右、十三ページ。